

エコ・ツアーとしての遺跡観光

ーメキシコ、カラクムル遺跡の事例ー

佐藤 孝裕

1、はじめにー観光資源としての遺跡

人が生活していた空間が放棄されると、時間が経つうちに廃虚となり、あるものは土に埋もれ、繁茂する草木に覆われ、そこにかつて人が暮らしていた痕跡さえわからなくなってしまふ。それが時として後世発見され、人の目に触れることがある。これが遺跡である。すなわち、遺跡とは過去の人々の生活の痕跡である遺構や遺物が残っている場所のことである。遺跡の中でも、歴史的に重要であったり、規模が人の目を引くほど壮大である場合、しばしば多くの人々の関心を引き付ける。今日、日本でも重要な考古学的発見があると、現地説明会に多くの愛好家が押し寄せる光景があちこちで見られる。それが更に遺跡公園のような形で整備されると、大勢の人々が訪れ、観光地化することもある。日本においては吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡などがその好例として挙げることができよう。

かつてマヤ文明やアステカ文明などが栄えたメソアメリカ地域でも同様のことが言える。メキシコ・シティ近郊にあるアメリカ大陸最大の都市遺跡テオティワカンや、ユカタン半島北部にあるチチェン・イツァー遺跡は、一年を通じて国内外から訪れる多数の観光客で賑わっている。このように、遺跡はいったん修復・整備されると、本来もっている考古学・歴史学的価値に加えて、観光という地域に経済的利益をもたらす産業活動の場所になることもある。そのためには、少しでも多くの人々を引き付けるだけの仕掛けが必要となる。遺跡の場合では、かつてその場所がどのような姿をしていたかを彷彿とさせるような復元をするという戦略がしばしばとられる。たとえば、メキシコのベラクルス州にあるエル・タヒン遺跡は、私が初めて訪れた1980年代後半の頃は、主要な建築物の修復はされていたものの、遺跡全体としてはまだ十分整備がされておらず、出土物も遺跡の入り口近くのバラック建てのような粗末な建物に置かれているだけであった。当然訪れる人も少なく、路線バスが近くを通っているだけだった。ところが、6年前に久しぶりに訪れてみると、状況は一変していた。この遺跡を訪れる際の拠点となるパパントラという近くの町からひっきりなしにエル・タヒン行のマイクロバスが出ており、遺跡の周辺には多数の土産物屋ができていた。立派な附属博物館も開設されていて、遺跡全体がまるでテーマ・パークのような賑わいを見せていた。まさに隔世の感があった。メキシコ国内では、先述したテオティワカンやチチェン・イツァーが同じような状況にある¹。エル・タヒン遺跡の場合は、このような大々的な整備・復元が多くの観光客を呼び寄せ、観光地化することにつながった一例と言える。ただ、このような戦略は観光産業という見地からは有益だろうが、時とすると遺跡というものが本来もつ価値を損なうことにもなり得る。吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡で、確たる根拠が乏しいまま一部の建築物が再建されたことに対して批判的な意見があるのもそのせいであろう。メキシコでも1910年にテオティワカンの太陽のピラミッドがメキシコ独立百周年を記念して五層のピラミッド型建築として復元されたが、実際は四層であったことが現在では判明している。恐らくはテオテ

イワカンというかつての偉大な文化的遺産を国威発揚のシンボルにしようとしたのであろうが、そのために学問的厳密さがなおざりにされ、誤った復元をする結果になってしまったと言える。メキシコ・シティを訪れる観光客のほとんどが必ず足を運ぶ場所として、メキシコの観光産業を潤わしているという点で経済的な貢献は大きいかもしれないが、学問的には大きな損失である。遺跡が重要な観光資源であることは間違いないが、観光というものがもつ経済的な側面にとられ過ぎると失うものも大きい (杓谷 2005:37)。

これとは逆に、観光資源としての価値よりも周囲の環境に配慮し、発掘調査を限定的に行っているのがメキシコのカラクムル遺跡である。本稿ではカラクムル遺跡を事例として取り上げ、環境保全と共存した遺跡観光のあり方について考えてみたい。

2、カラクムル国家の概略史

カラクムル遺跡はメキシコのカンペチェ州の東端、グアテマラの国境から35kmほどのところにある (図1)。面積30km²以上の広い範囲に6250もの建築物が分布しているマヤ地域屈指の大遺跡だが (Braswell et al.2004:167; Martin and Grube 2000:101)、辺境の密林地帯にあるため長い間その存在は知られないままで、1931年に初めて探検家で植物学者のランデル (Cyrus Longworth Lundell) によって発見された (Carrasco et al.1999:47; Folan et al.1995:310)。その後もマヤの歴史を考える上で重要な遺跡としての認識は乏しく、ただ規模が大きく石碑の数が多い²遺跡としてもっぱら知られていた。状況が変わったのは1970年代に入ってからで、マーカス (Joyce Marcus) は紋章文字の研究から、カラクムルが古典期後期のマヤ低地南部の地域的首都であった可能性を示唆した (Marcus 1976)。そしてそのことが具体的な史実として浮かび上がってきたのは、1980年代の後半以降であった。カラクムル遺跡の発掘や碑文解読の進展の結果、それまで不明であった古典期前期末のティカルの衰退の原因にカラクムルが大きく関わっていたこと



図1 メソアメリカ地域

と、カラクムルがティカルに匹敵する強国だったことが明らかになってきたのである。

人々がカラクムルに住み始めたのもティカルに劣らず古く、先古典期中期にまで遡り (Folan et al. 1995 : 310)、先古典期後期になると地域における主要な国家の一つに成長した。しかし、その歴史が文字記録によって明らかになるのは古典期以降である。王の事績が文字資料の上から判明するようになるのは6世紀に入ってからで、542年から909年頃の間には16人の王が存在したことがわかっている (Carrasco et al. 2005 : 41)。6世紀の半ばには、カラクムルの勢力はティカルをも凌ぐようになり、絶頂期には王国の支配領域は13000km²、総人口は175万人にも達した³ (Braswell et al. 2004 : 162・171 ; Folan et al. 2001 : 227)。直接的な支配領域が広だけでなく、紋章文字が生起する範囲もどの国家よりも広く、その強盛を物語っている (Braswell et al. 2004 : 162・170)。王国としての歴史は9世紀に終焉するが、人々の居住は後古典期後期にまで及び、1450年から1550年の間にも儀礼活動が行われた痕跡が見つまっている (Carrasco et al. 2005 : 41)。このように、カラクムルは勢力の強さでも歴史の長さでも、ティカルと並ぶマヤ地域を代表する国家であった。

3、「観光」地としてのカラクムル遺跡の可能性

観光地として成功する、すなわち多くの観光客を引き付けるためには様々な条件が必要であろうが、中でもとりわけ重要なのがアクセス (access) とアメニティ (amenity) の二つのAであると思われる。つまり、いかにそこに容易にたどり着き、快適に過ごすことができるかが重要なポイントであろう。そこで、この2Aの観点からカラクムルについて検討してみたい。

まずアクセスであるが、カラクムル遺跡を目的地とする公共交通機関はない。従って個人旅行者が遺跡に行くには、レンタカーを借りるかあるいは現地の旅行社が主催するツアーに参加するしかない。遺跡を訪れる人がまだあまり多くない現状では、車と運転手をチャーターして個人で行くという選択肢しかない場合もあるし、事実私もそうせざるを得なかった。しかもカラクムル遺跡は生物保護区の入口からも約60kmほど離れている上、遺跡までの道は森林の中をうねうねと走っている。そのためきわめて見通しが悪く、道幅も乗用車がようやく離合できるほどの狭さである。時として森林から飛び出してくる保護動物にも気を配らねばならないので、運転は慎重にならざるを得ない。私が行ったときも、道に飛び出した動物を避けたために道路脇の木に車がぶつかって立ち往生し、乗っていた男女から助けを求められると同時に、自分たちのような目にあわないように動物に注意するよう忠告された。遺跡までの道のりがこのような悪条件下にあるので、大型バスで団体旅行者が訪れるのはきわめて難しいと言える。つまり、経済的利益を追求するような観光資源には向いていない。

アメニティもかなり劣悪である。まだ整備して間もないせいかもしれないが、遺跡自体の入口には建物が一つあるきりで、そこでは入場料の支払いと記帳が行われるだけであり、販売されているものといえば、ガイドブックを除けばミネラル・ウォーターだけである。それ以外のものを飲んだり、あるいは何かを食べたければ、生物圏保護区の外まで出て店を捜さなければならない。博物館も併設されておらず、出土物を見たい人は、約350km離れたカンペチェ市内のサン・ミゲル考古学博物館 (Museo Arqueológico y Fuerte de San Miguel) まで行かねばならない。このように、遺跡をいわゆる世間一般の「観光」の対象と考えている人にとって、カラクムルはおおよそ食指が動くような場所ではない。

では、他のマヤ遺跡も同様な条件下にあるのであろうか。カラクムルと同様に森林の中に遺跡が散在しているメキシコのコバー遺跡や、グアテマラのティカル遺跡の事例を比較対象としてみ

てみたい。ティカルの場合は、カラクムルよりも樹高の高い熱帯雨林に覆われているが(写真1)、アクセスとなる道路はより整備されていて、観光の拠点であるサンタ・エレナやフローレスとティカルの間は小型のシャトルバスがひっきりなしに往復している。遺跡に隣接してホテルも2軒あり、レストランも数軒あるので快適な滞在が可能である。もっぱら欧米からの観光客を当て込んだ遺跡近くのレストランは、店内がきれいで様々な飲食物を提供するだけでなく、衛星放送で米国の番組も見られる。この「異空間」にいと、自分が熱帯雨林のまっただ中であることを忘れてしまう。土産物屋もいくつもあるので、旅の記念の品を買うこともできる。もちろん、規模は大きくはないが内容が充実した博物館も併設されている。このように、ティカルはジャングルの中の遺跡なのだが、人々が気軽に訪れ楽しむことができる観光地としての条件を備えているのである。

コバー遺跡も、大きな建築物が熱帯雨林の中に点在しているという点でカラクムルやティカルに類似しているが(写真2)、多くの観光客で賑わう海岸沿いのトゥルム遺跡から内陸に50kmも入ったところにあるせいか、ティカルに比べると訪れる人の数はずっと少ない。それでも遺跡がある村を路線バスが通っているため、アクセスにはそれほど不自由しない。遺跡の近くには数軒のレストランやホテルがあり、とりわけ地中海クラブが運営する高級ホテルには冷房完備の客室やレストランに加えてプールもあり、快適に過ごすことができる。

こうして比較するとわかるように、多様な動植物が生育する高温多湿の熱帯のジャングルの中に建築物が点在するという点では、カラクムルはティカルやコバーと共通しているが、交通や滞在といったアクセスとアメニティの良好さの点に目を向けると対照的であり、およそ観光には適さないと言えるのである。だが、このアクセスとアメニティの貧困さは、果たしてカラクムルにとって単なるデメリットであろうか。むしろ、新しい型の遺跡観光のあり方を示していると言えるのではなかろうか。新しい型の遺跡観光、すなわちエコ・ツアーとしての遺跡観光である。ティカルもコバーも、遺跡が自然と共存しているという点ではカラクムルと類似しているが、アクセスとアメニティの良好さがかえって災いして、この新しい観光の可能性が比較的乏しいと思われる。特にティカル遺跡の場合、面積576km²の同名の国立公園内のうっそうと生い茂る熱帯雨林のただなかにあるが、20世紀後半の政府による開発のために森林は減少しつつある。古来マヤ人の主要な農耕方法である焼畑農耕の拡大のため、熱帯雨林の総面積の約三分の一が破壊された(ユネスコ世界遺産センター 1997: 42-43)。その傾向はペテン地方の総面積の約40%が自然保護区に指定された後も続いている。問題は森林破壊にとどまらない。遺跡への道路が整備された結果、密猟者や盗掘者が増加し、ティカルの自然や遺跡を損なっているのである(ユネスコ世界遺産セ

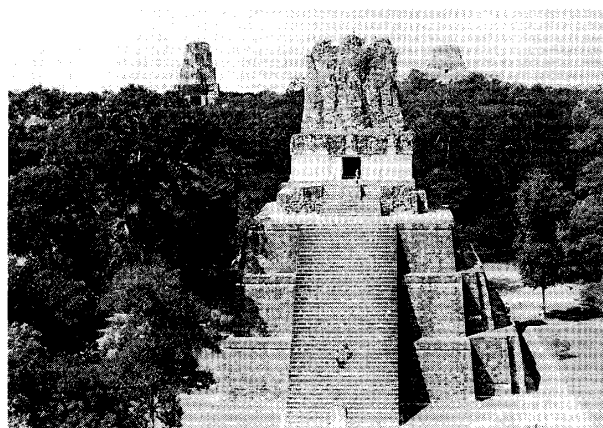


写真1 ティカル遺跡

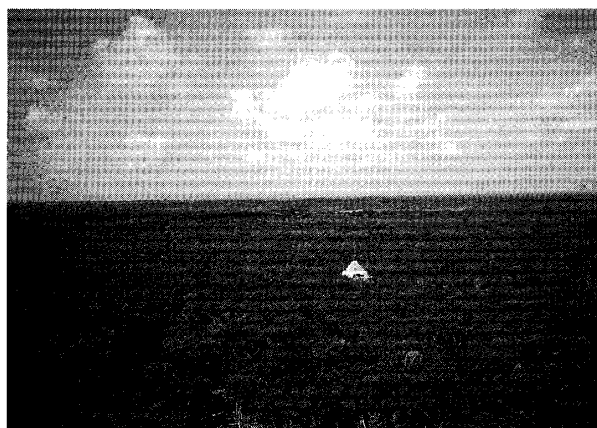


写真2 コバー遺跡

ンター 1997:43)。このアクセスの整備は人的被害ももたらしている。すなわち、世界中から訪れる観光客を狙った犯罪が頻発しているのである。広大な範囲に建築物が散在しているため、特に中心部から離れた「碑銘の神殿」へと至る1 km近い道を通る観光客が、数が少ないのと道が高い木立の中を歩いているために待ち伏せして襲うのが容易であることから、犯罪者の格好の標的になっている。時には女性観光客への暴行事件も生じている有り様である (Gorry et al. 2004: 184)。

観光は、経済的観点からはより多くの人に関わる方が望ましい。多くの人を訪れるほど現地に経済的利益をもたらすからである。メキシコを除いて産業に乏しいマヤ地域の国々では、観光による収益は無視できない。しかし、多くの人がある場所を訪れるということは、それだけその地の自然や文化を損なうことにつながりかねない。逆に言えば、その地が本来もつ価値を極力保持しながら、なおかつ観光活動も行われる場所であるためには、観光が限定的に行われる方がふさわしい。その意味で、現在のカラクムル遺跡は豊かな可能性を有しているのである。もちろん、エコ・ツアー自体は決して真新しいものではなく、現在世界の様々な場所で行われている。しかし、カラクムルのように歴史的に重要な遺跡と豊富で多様な動植物の両方があまり損なわれることなく残っている場所は、マヤ地域内でも稀である。

4、カラクムル生物圏保護区 (Biosfera de reserva de Calakmul)

2002年6月27日、カラクムルはユネスコ世界遺産の文化遺産に指定された⁴。1000年以上にわたってマヤ人が住み、数多くの遺構や遺物が残されていることがその理由である。マヤ人が残した遺跡でユネスコ世界遺産に指定されたものとしては、他にもパレンケ、チチェン・イツァー、ウシュマルがある。メキシコ以外でも、グアテマラのティカルとキリグアー、ホンジュラスのコパンなどの遺跡がユネスコ世界遺産に指定されている。それ以外にも、歴史・文化の点で重要な遺跡が、マヤ地域には数多く存在する。だが、カラクムルにはそれら他のマヤ遺跡の大半と異なる点がある。それは、その重要性が遺跡としてのみにとどまらず、周囲の生態系全体に及んでいるという点である。

メキシコは国土こそ米国や中国ほど広大ではないが、豊かな自然に恵まれているという点では世界でも屈指である。事実、地球上の動植物の50%が世界でも5ヶ国にのみ存在するのだが、メキシコもブラジル、中国、インドネシア、コロンビアとともにその中に入っている (Gonzalez-Castilla 2000: 48)。具体的に列挙すると、世界第2位の439種類の哺乳類、世界一の707種類の爬虫類、世界第4位の282種類の両生類が生息しているのに加えて、鳥類の11%にあたる1000種類以上の鳥が生息している (Gonzalez-Castilla 2000: 48)。植物に目を転じて、世界第4位の26000種類の植物が生育している。しかも単に種類が多いだけではない。動物のうち約800種がメキシコにのみ生息する特有の種で、その数は哺乳類が139種、爬虫類は393種、両生類は179種にも及び、その大半がカラクムルの周辺に存在するのである (Gonzalez-Castilla 2000: 48)⁵。このように、カラクムル遺跡を含む一帯は、動植物の多様性の点でも保護の緊急性の点でもきわめて重要な場所なのである。こうした理由から、この地域は1989年5月23日に大統領令で生物圏保護区に指定された。生物圏保護区とは、資源と自然環境の保存を目的として制定された自然区で、持続可能な生態系の利用を確保するために創設されたものである (Gonzalez-Castilla 2000: 47)。1978年に指定されたモンテス・アスレスを始めとして現在で34を数えるが⁶、中でもカラクムル生物圏保護区はメキシコで2番目に大きな自然保護区で、面積は723185haに及ぶ (Gonzalez-Castilla 2000: 47)。カラクムル生物圏保護区には、北部と南部にそれぞれ面積147915haと100345haの中

核となる地帯がある。この両核地帯は保護区の中でも最もよく保存されており、生態系を変えるような利用は制限、あるいは禁じられている (Gonzalez-Castilla 2000:47)。カラクムル遺跡があるのはこのような地域であり、従ってカラクムル遺跡観光は自然観光の要素、すなわちエコ・ツアーの要素を伴っているのである。

ユカタン半島には数多くのマヤ文明の遺跡があり、観光資源として活用されているものも少なくない。もっともその歴史は浅く、1970年代にカンクンが国際的リゾート地として開発されて以降に過ぎない (杓谷 2005:41)。そしてカンクンは1986年には外国人訪問客の数で遂にアカプルコを上回り、名実共にメキシコを代表する観光地になるのだが、この同じ年にメキシコを中心とするマヤ文化圏の3カ国がルータ・マヤ (Ruta Maya) という名称の地域観光計画を発表した (杓谷 2005:43)。現在はムンド・マヤ (Mundo Maya) と名称を変え、加盟国もメキシコ、グアテマラ、ベリーズ、ホンジュラス、エル・サルバドルの5カ国に増えたこの計画は、マヤ文明の遺跡が多数存在するこれらの国々が協力し、いわゆる持続可能な開発の理念のもと環境に配慮した観光開発を促進すると同時に、観光を通じての雇用の創出など地域の活性化を目指そうというものである (Eltringham 1999:508; 杓谷 2005:43)。カンクンという観光開発における大成功を経験したメキシコでは、1990年代後半以降ユカタン半島北部のカリブ海沿岸にリビエラ・マヤと名付けられた新たな観光圏が設けられ、多くの観光客がカンクン経由で訪れる一大観光エリアに成長しているが (杓谷 2005:44-46)、これもムンド・マヤ計画の一環とみてよいであろう。

だが、ムンド・マヤ計画は必ずしも当初の理念通り進んではいない。それは、たとえばリビエラ・マヤでも観光客を引き付けている遺跡がごく一部に限られているという、経済活動という観光の一側面からみてのことではない。問題はカンクンにある。メキシコで最大の観光地に発展したカンクンは、当然の帰結としてムンド・マヤ地域の最大の観光拠点になっている (杓谷 2005:43-44)。フロリダ半島から目と鼻の先にあるという地理的利便性や、国際空港を有するというアクセスの良さに加えて、高級ホテルがエメラルド・ブルーのカリブ海の砂浜沿いに林立する常夏のリゾートであるカンクンには、一年中大勢の観光客が米国やヨーロッパから押し寄せている。すなわち、従来型観光の特徴であり、過度の開発につながりかねないマス・ツーリズムが、ここでは典型的に見られるのである (Eltringham 1999:505・508)。

その対極にあるのがカラクムルである。アクセスにもアメニティにも恵まれないカラクムル遺跡は、必然的に多くの観光客を呼び込むことになっていない。現在も修復作業は進行中だが、生物圏保護区にあるため、生態環境に悪影響を及ぼさないよう制限がなされている (写真3)。不



写真3 カラクムル遺跡

十分な修復は建築などに関心をもつ者の嘆きを呼んでいるようだが、逆に自然の中に埋もれた遺跡というロマンチックな情景は、見る者を魅了する (Greensfelder 2003:220)。遺跡のみを目的にする者には不満が残るかも知れないが、遺跡もエコ・ツアーの一部と考えればいいのである。発掘は確かに学術的作業であるが、現状を回復できない状態に変えてしまうという点では破壊に他ならない。殊に修復という作業の場合、その目的が見られることを一義的に考えてのものであれば、換言すれば見に来る人の目を意識する、すなわち

観光を目的にするものであれば、不必要ということも言えるのではなかろうか。確かに、チチェン・イツァーやテオティワカンのように修復作業がかなり完全になされた遺跡は、かつての高度な文化を視覚的に理解させ、見る者に感動を与える。しかし、それによって失われるものもあるのならば、別のあり方も考えるべきであろう。現在のカラクムル遺跡はまさにその好例だと思ふのである。

5、おわりに

現在日本でも、通常のパック・ツアーに飽き足りない人々が、他の人とは違った体験を求めてあまり人の行かない場所に行くいわゆる「秘境ツアー」が盛行している。これにはエスニック観光的要素をもつものやエコ・ツアー的要素をもつもの、あるいはその両者を含むものがあるであろう。人跡未踏の地に行くのはかつては文化人類学者の専売特許だったが、現在では一般の人達もそのような場所に行くようになってきている。それも文化人類学に観光を研究対象とする観光人類学という新しい分野が生まれた一因かもしれない。

エコ・ツアーの盛行は、日々の生活に疲れた現代人が日常からしばし逃げ出し、自然の中で憩い、活力を取り戻すことができるという点で有益ではあろう。しかし、エコ・ツアーの中にはエコの名を冠しただけの従来型の観光旅行も少なからずあるのも事実である。豊かな自然に恵まれた場所を開発してリゾート地を作り上げ、豪華なホテルで何不自由ない生活を送る旅行をエコ・ツアーと称して売り出している事例は決して少なくない。これなどはまさにエコ・ツアーではなく「エコ搾取 (eco-exploitation)」(Eltringham 1999: 507) である。それに対して、カラクムル遺跡には訪れる者に物理的快適さを提供するものは何もないに等しい。その代わり、豊かな自然を満喫できる。多くの観光客を引き付けるよりも、現状を極力維持し、訪れる限られた人々に自然と一体化した遺跡を楽しんでもらう。カラクムル遺跡観光はそのようなエコ・ツアーの一類型であり、その意味で新しい遺跡観光のあり方を提示しているのである。

注

- 1 チチェン・イツァーの現在の建築物のほとんどは、1924年から1940年までに米国のカーネギー研究所が実施したプロジェクトによって修復されたのだが、当初からマヤ文明の素晴らしさを喧伝するためにこのように人目を引くような形で整備されたという。杓谷 2005: 49。
- 2 今日までにマヤ地域最多の120もの石碑が見つまっている。Carrasco 1998: 380。
- 3 発見された石碑のうち、100以上がこの絶頂期に当たる652年から752年の間に建てられている。Braswell et al. 2004: 169; Folan et al. 1995: 327。
- 4 日本の国土の5倍の面積のメキシコは、広大な自然に恵まれているのに加えて古代から植民地時代に至る長い歴史を有しており、カラクムル以外にも以下のようにユネスコから世界遺産として指定された場所も多い。なお、括弧内は世界遺産に指定された年を表す。シアン・カアン(1987)、古代都市パレンケと国立公園(1987)、メキシコ・シティ歴史地区とショチミルコ(1987)、古代都市テオティワカン(1987)、オアハカ歴史地区とモンテ・アルバンの古代遺跡(1987)、プエブラ歴史地区(1987)、古都グアナファトとその銀鉱群(1988)、古代都市チチェン・イツァー(1988)、モレリア歴史地区(1991)、古代都市エル・タヒン(1992)、エル・ビスカイノの鯨保護区(1993)、サカテカス歴史地区(1993)、サン・フランシスコ山地の岩絵(1993)、ポポカテペトル山腹の16世紀初頭の修道院群(1994)、古代都市ウシュマル(1996)、ケレタロの歴史史跡地区(1996)、グアダラハラのおスピシオ・カバーニャス(1997)、パキメの遺跡(1998)、カサス・グランデス(1998)、ト

ラコタルパンの歴史遺跡地帯 (1998)、シヨチカルコの古代遺跡地帯 (1999)、カンペチェ歴史的要塞都市 (1999)、ケレタロのシエラ・ゴルダのフランシスコ会修道会伝道施設群 (2003)。

5 植物は約1500種存在する。Gonzalez-Castilla 2000 : 51。

6 メキシコの生物圏保護区に関しては、下記のサイトを参照。

<http://www.conanp.gob.mx/anp/rb.php>。

引用文献

- Braswell, Geoffrey E., Joel D. Gunn, María del Rosario Dominguez Carrasco, William J. Folan, Laraine A. Fletcher, Abel Morales Lopez, and Michael D. Glascock
2004 'Defining Terminal Classic at Calakmul, Campeche.' In *The Terminal Classic in the Maya Lowlands: Collapse, Transition, and Transformation*, eds. Demarest, Arthur A., Prudence M. Rice, and Don S. Rice, pp.162-194. University Press of Colorado, Boulder.
- Carrasco Valgas, Ramon, Sylviane Boucher, Paula Alvarez Gonzalez, Vera Tiesler Blos, Valeria García Vierna, Renata García Moreno, and Javier Vazquez Negrete
1999 New Evidence on Jaguar Paw, a Ruler from Calakmul. *Latin American Antiquity*, vol. 10, No. 1, pp.47-58.
- Carrasco Valgas, Ramon y Marines Colon Gonzalez
2005 El reino de Kaan y la antigua ciudad maya de Calakmul. *Arqueología Mexicana* 75, pp.40-47.
- Eltringham, Peter, John Fisher, and Iain Stewart
1999 *The Maya World*. Rough Guides Ltd., London.
- Folan, William J., Joyce Marcus, Sophia Pincemin, María del Rosario Dominguez Carrasco, Laraine Fletcher, and Abel Morales Lopez
1995 Calakmul: New Data from an Ancient Maya Capital in Campeche, Mexico. *Latin American Antiquity*, vol. 6, No. 4, pp.310-334.
- Folan, William J., Joel D. Gunn, María del Rosario Dominguez Carrasco
2001 'Triadic Temples, Central Plazas and Dynastic Palaces: A Diachronic Analysis of the Royal Court Complex, Calakmul, Campeche, Mexico.' In *Royal Court of the Ancient Maya, Volume Two: Data and Case Studies*, eds. Inomata, Takeshi and Stephen D. Houston, pp.223-265. A Westview Press, Boulder.
- Gonzalez-Castilla, Susana Rojas
2000 La reserva de la biosfera de Calakmul. *Arqueología Mexicana* 42, pp.46-51.
- Gorry, Conner, Lucas Vidgen, and Danny Palmerlee
2004 *Guatemala, Belize & Yucatan*. Lonely Planet Publications, Pty Ltd.
- Greensfelder, Ben
2003 *Yucatan*. Lonely Planet Publications, Pty Ltd.
- Marcus, Joyce
1976 *Emblem and State in the Classic Maya Lowlands*. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Harvard University, Washington D.C.
- Martin, Simon and Nikolai Grube
2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*, Thames and Hudson Ltd, London.
- 杓谷茂樹
2005 「遺跡観光におけるマヤ・イメージの生産と消費—カンクン、リヴィエラ・マヤ観光の場合—」吉田栄人 (代) 『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究』, pp.37-56、平成14~平成16年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (1)) 研究成果報告書
ユネスコ世界遺産センター
1997 『ユネスコ世界遺産・2・中央・南アメリカ』講談社